様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １０ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2011～2014
課題番号：２３６５２０２１

研究課題名（和文）美術家インタビューのデジタル・アーカイブ化による戦後日本美術史の方法論的刷新

研究課題名（英文）A digital archive of artist interviews as a new methodology in the history of postwar Japanese art

研究代表者
Ｏｓａｗａ　Ｋｅｉ（OSAWA, Kei）

東京大学・総合研究博物館・特任研究員

研究者番号：８０５７１２３１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、戦後日本美術に関する事実検証を深め、現代美術史において「オーラル・ヒストリー」の方法論を実施し、マルチメディアによる一般公開を目指した。
　戦後日本を代表する美術家の仕事と歴史的立場を分析し、彼らが形成した「運動」や「団体」を中心に美術界における交流を再評価するにあたって、「インタビュー」という方法を導入した。当時の主要人物の証言を収録する必要性が差し迫るなか、戦後日本美術史に役立つ新たな事実検証を行った。また、現代美術史の方法論において、近年発展した「オーラル・ヒストリー」の実施方法を新たに検討し、ビデオを中心とした収録および一般公開の方法を試みた。

研究成果の概要（英文）：The present research is a factual investigation in the history of postwar Japanese art, an attempt to renew the methodology of oral history in the history of contemporary art, and an attempt to publish its results on a multimedia support.
In analyzing the work and the historical significance of artists representing postwar Japan, the conduction of interview was introduced as the main method. As it becomes increasingly urgent to record the testimonies of the principal protoganists of the era, new factual evidence was obtained, which will be of use for the history of postwar Japanese art. Furthermore, concerning the methodology of the history of contemporary art, new ways of implementing the methods of oral history were investigated. An attempt at video recording the testimonies and publishing them on a multimedia support was also made.

研究分野：美術史

キーワード：インタビュー　デジタル・アーカイブ　戦後日本美術

１．研究開始当初の背景

戦後日本美術研究は、仏パリ・ポンピドゥー・センター開催の「前衛の日本」展（1986年）、及び横浜美術館開催の「戦後日本の前衛美術」展（1994 年）をきっかけに、1980年代より学術的に正当化され、徐々に確立された。また、2010 年代より米国をはじめ国内外で多くの展示が開かれ、20 世紀後半の世界美術史の文脈において戦後日本美術が位置づけられ、全面的な再評価の対象となった。戦後日本美術の歴史的特徴は、様々な芸術運動を通じて発展し、具体美術協会のパフォーマンスや実験工房のイベントをはじめ一過性の作品を多様に生み出し、欧米の前衛運動と呼応しながらも「日本」の伝統と現状を取り上げ、多様な芸術分野が相互に関わり合いながら独自の発展を遂げてきたことにある。

しかし、戦後日本美術研究を支えてきた基本資料は、主に現存の作品、出版物、文字資料、そして各種報道記録であった。戦後日本美術を構成する諸運動が生み出した作品や一時的なイベントを振り返る際に、その歴史学的検証に著しく欠落していたのが、当事者による、「生」の証言であった。

一方、インタビューを中心に歴史学的資料を収集する「オーラル・ヒストリー」という方法論が日本でも注目され、研究方法として採用されてきたものの、結局のところ、そのアウトプットが文字資料に変換される場合が多かった。研究対象となる時代の主要人物の証言を得たものの、それが文字のみで残ることが、現在の研究方法に相応しくないと思われた。すなわち、作品における一過性、芸術家および芸術運動間の交流、パフォーマンスやイベントの創作過程をはじめ、戦後日本美術研究の要点を網羅するためには、美術家の全貌を明確にする学術的なインタビューを、視聴覚的調査方法によって集める必要があった。

また、インターネット配信の一般化によって、美術家のインタビューを動画で幅広く公開し、「戦後日本美術の証言」を留める映像コレクションの構築が可能になった。それを基盤に、世界各国の有力な戦後美術アーカイブとの新たな交流と情報交換のあり方が見出せた。

戦後日本美術研究の資料収集における上記問題の認識、そして歴史学の検証における方法論的刷新の必要性が本研究の出発点となった。

２．研究の目的

本研究では、戦後日本美術を代表する美術家、批評家および学芸員の「学術的インタビュー」を録画し、それを無料で一般公開することによって、研究対象に関する知見を増やすのと同時に、戦後日本美術研究において方法論的刷新を図ることが主要目的である。

そのため、まずは約５０人のインタビューを行うことを想定する。インタビューには二つの目的がある。ひとつは、従来の研究方法に基づき、質問や事実確認を行い、各々のインタビュー対象者の仕事を再評価することである。もう一つは、美術家のアトリエ、スタジオやアーカイブを訪問し、その環境を映像に留め、創作環境を記録し、そこに保管されている作品や資料を調査することである。この「学術的インタビュー」の狙いは、証言及び事実確認に加えて、新しい資料の発掘と各美術家の環境の視覚的な記録を束ねた統合的な調査にある。

研究の最終目的は、インターネット上の特設サイトに動画を一般公開し、オンライン・アーカイブを構築することである。戦後日本美術に関する展示図録や図書に対して、動画記録資料を集め、「映像エンサイクロペディア」を作る。更に、非営利的且つ学術的な利用枠組み内において、海外の学術研究機関と同時代の美術家インタビュー・コンテンツの相互交換を推進し、アーカイブの拡大を目指す。

オンライン・アーカイブの構築後、そのアーカイブにおける方法論的特徴を評価するために、シンポジウムの開催も想定する。ここでは、インタビューを介して得た情報や知見を踏まえつつ、研究方法としてのインタビューを再評価する。

よって、本研究の展望は、新しい調査及び記録方法を導入することによって、戦後日本美術研究における新たな知見を得て、研究方法自体を刷新することである。

３．研究の方法

本研究の第一段階は、戦後日本美術を代表する、存命の美術家を、「学術的インタビュー」の対象者として選定することである。約５０人の対象者を選ぶことにする。その選定基準は複数ある。まず、二次資料よりも一時資料に価値があるのと同じように、より直接的な証言を得たいため、「当事者」を優先する。多くの当事者は高齢であり、40 から 50 年前の創作や出来事に対し、記憶は当然のこと曖昧になっていて、場合によっては事実が「再解釈」されていることもある。しかし、この問題を難点と考えず、文献等で明らかに鳴っている事実と照合することによって、インタビュー対象者の記憶を正すことは可能である。それ以上に、50 年近くが経って、当事者であった美術家達がその仕事と時代をいかに評価し、判断しているか、記録することが重要である。

研究開始時に定めたインタビュー対象者は下記の通りである。美術全般では赤瀬川原平、中西夏之、谷川晃一、上前智祐、嶋本昭三、堀尾貞治、元永定正、山崎つる子、ヨシ

ダミノル、山口勝弘、小清水漸、菅木志雄、関根伸夫、李禹煥、オチオサム、桜井孝身、菊畑茂久馬、池田龍雄、中村宏、秋山祐徳太子、糸井貫二、オノ・ヨーコ、横尾忠則、河口龍夫、彦坂尚嘉、写真では細江英公、森山大道、東松照明、中平卓馬、奈良原一高、荒木経惟、川田喜久、石内都、映像では飯村隆彦、松本俊夫、足立正生、音楽では一柳慧、小杉武久、福島和夫、湯浅譲二、刀根康尚、舞踏では麿赤兒、大野慶人、天児牛大、笠井叡、室伏鴻、演劇では唐十郎、四谷シモン、批評では千葉成夫、中原佑介。

ここで明らかなのは、研究課題で「美術家」と掲げたインタビュー対象者は、明らかに「美術」の枠組みを超えて、分野横断的な活動を行ってきていることである。戦後日本においても、イギリス人アーティストのディック・ヒギンズが「インターメディア」と命名した、統合芸術運動が発展したからである。本研究の「インタビュー」の一つの狙いは、各対象者において「インターメディア」的な交流について問いかけることにある。

インタビューの対象者を選定した上で、各々のインタビューに向けて調査およびスクリプト作成する。ここで「スクリプト」と呼ぶものは、インタビューの台本となる質問集である。資料調査に基づいて作成したスクリプトは、各美術家の肖像を描くための資料でもある。ただし、この質問は新しい知見をえるための手段である以上、美術家が語り慣れている紋切り型の会話を誘導するようなものであってはならない。

次の段階では、美術家のアトリエやアーカイブを訪問し、可能な限り創作環境を把握し、創作過程を録画した上でインタビューを行う。しかし、この点において状況は様々である。例えば、インタビューの対象者が現役で活動している場合、統合的な調査が可能である。例えば、舞踏家・振付家の麿赤兒は１９７２年の舞踏団結成以来、活動を絶えずに行ってきている。スタジオを訪ねると、４０年余の活動の記憶と痕跡がそこに留められていて、現在の活動にも繋がっているため、「生きた記憶」を辿ることができる。逆に、活動を中断している美術家の場合、アーカイブ訪問となる。「当事者」であったものの、その作品との関係性が隔離されているため、過去の遠い記憶を呼び出すために難航する。

インタビューのスクリプトは徹底的に作成するが、強制的なフォーマットにはしない。今までと違う知見や逸話を得るのが目的であるため、インタビューの対象者が語り慣れている話から逸脱し、会話のなかでしか出現しない予想外の展開や話題を狙うことも重要であるからだ。そういう意味では、インタビューの際にある種の「即興性」が必要である。

また、戦後日本美術の中核を成す、１９５０年代半ばから１９７０年代前半まで、約５０年が経っている。インタビューの当事者は、当然のこと、今となっては当時の活動や出来事に対して一定の距離を置き、時にはある点を批判し、時には否定し、場合によっては全く違う活動を行っている。言い換えると、戦後の当事者が、晩年において、当時をどう振り返えて、どう評価しているか、記録することも大事である。それが前記の「再解釈」の重要性である。美術家とその作品の間に生じた「同時性」という直接的な関係が失われ、「回顧展」や歴史的な区切りを設けた「戦後美術展」が行われるようになると、「解釈」に重点を置くことがより大事になる。

インタビューの収録後、編集自体は最低限に留めることにした。そのため、インタビュー対象者への問いかけも端的な質問にし、その質問内用を映像の字幕に書き込み、インタビューする側のプレザンスを控える。いずれ、全てのインタビュー内容を英訳し、字幕を加え、インタビュー・アーカイブ全体を和英バイリンガルの情報サイトとして構築するのが本プロジェクトの理想型である。

４．研究成果

本研究で行った調査において最も著しい成果は、インタビューに向けて行った資料調査の結果、戦後日本美術を構成する人物及び諸運動について、その地理的な位置づけと相互の交流や関係性がより明らかになったことである。現在、「戦後日本美術」という括りで纏められている活動は、当時、「関東」と「関西」、「都市」と「地方」という地理的な境界線で区別されていた。同時に、「抽象表現主義」、「ノン・アート」、「アンチ・アート」、「政治活動」という思想的な区別も働き、それぞれの運動やグループによる活動をより細かく位置づけていた。調査でその位置づけを正確に把握し、グループ間の交流や関係性を明確にすることができた。その結論をインタビュー対象者に提出し、判断や意見を仰ぐことによって、解釈に関する議論が進められた。

また、三回の学会発表に亘って、研究の方法論について議論し、本研究の方針を評価することができた。明らかになったのは、録画された「インタビュー」が、当時の出来事に関する証言であるのと同時に、いずれは作品と同等に「一時資料」として機能することである。つまり、美術家達が晩年に収録した「2010 年代の記録」として、戦後日本美術研究の基礎資料体を補うものとなる。発表では、特にパフォーマンスやイベントなど、一過性の作品に注目した。予め記録しない限り、痕跡を全く残さないため、パフォーマンスやイベントは「証言」のみにおいてその意味が伝わるからである。

しかしながら、想定していたインタビューを全てインターネット上に一般公開し、データベース間の国際交換を築くという、本研究

の最終目的は、研究期間内では達成できなかった。それには二つの原因がある。ひとつは、想定していたインタビューの本数が圧倒的に多く、研究代表者一人では実現できなかったからである。もう一つは、編集およびデータベース構築に関する技術的な問題である。具体的には、編集及び英語字幕の導入に必要な作業が時間を要するため、研究計画時に想定していた作業時間を遥かに上回っているからである。

そのため、編集および構築作業を続け、年内のインターネット上の公開を目指す。本研究で構築するアーカイブは、今後の調査発表や国際的な情報交換の基盤となるため、本研究の目的でありながら、その更なる発展と拡大の出発点として位置づけている。

５．主な発表論文等

〔学会発表〕（計 3 件）

① OSAWA Kei、「動作とフィルム：戦後日本におけるパフォーマンスの記録について」、EHESS・早稲田大学共催学会「映像に見る戦後の日本社会　1945 年から現在まで」、2011 年 12 月 9 日、パリ日本文化会館（フランス）

② OSAWA Kei、「現代における戦後日本のパフォーマンス：美術館での記録保存と再演出をめぐって」、早稲田大学国際日本文学・文化研究所（WIJLC）・フランス国立東洋言語文化研究学院（INALCO）共催国際シンポジウム「記憶の痕跡」、2012 年 10 月 13 日、早稲田大学（東京都新宿区）

③ OSAWA Kei、「戦後日本のパフォーマンスにおける行為・痕跡・再現」、セルジー国立高等美術学校主催現代日本美術史公演シリーズ「ジャポノロジー」、2013 年 6 月 21 日、セルジー国立高等美術学校（フランス）

６．研究組織

(1)研究代表者

OSAWA, Kei
東京大学・総合研究博物館・特任研究員
研究者番号：80571231